

国語

注意

- 1 問題は 1 から 5 までで、12 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 麦の穂が真つすぐに伸びる。
- (2) 桜の植えられた河畔の堤を歩く。
- (3) 帰宅して上着をハンガーに掛ける。
- (4) 慕っている先輩に感謝の手紙を書く。
- (5) 狩猟に用いられた矢じりの石質を調査する。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 体力テストで、ハンドボールをナげる。
- (2) 惑星探査機がウチユを航行する。
- (3) 平和がエイエンに続くことを願う。
- (4) 科学技術がイチジルしく進歩する。
- (5) 長距離走のタイムをビョウの単位まで計る。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

バレリーナを夢見ていた「私」は、少女時代にフェリーでバレエ教室に通い、往復の船上でも練習を続け、夢を叶えた。やがてバレリーナを引退し、故郷に戻った「私」は、大輔に誘われ佐代子が営む習字教室に通う。船上でバレエの練習に励む姿に勇気をもらい習字教室を始めたことを佐代子に打ち明けられた「私」は、佐代子に頼まれ船上で踊ることにした。

無様でもいい。

今の私に出来る精いっぱいしよう。

揺れる船の上で踊り続けるんだ。

月明かりをスポットライトに。

風を拍手に。

海を湖に——。

力を込める。

手に、足に、指の先に、爪の先に——。

踊れ、踊れ——。

そして白鳥のように——。

跳べ——。

「はあ……っ。」

終わった。

踊り終えた。

酷く息が乱れて呼吸をするのも辛い。

少し踊っただけなのに、全力疾走した後のようだ。

——パチパチパチ。

風や船のエンジン音にも負けないくらいの拍手が聞こえた。

佐代子さんだ。

(1) いつまで続くのか分からないくらい、長い拍手をしてくれた。

そして、私のことをまっすぐに見つめて言った。

「私はバレエのことはそんなによく分からないけれど……。」

佐代子さんは、柔らかく笑って言葉を続ける。

「やっぱりあなたはあなたのままでいいんじゃないかしら。」

「佐代子さん……。」

自然と、涙が頬を伝った。

そのたった一言が、自分自身を縛り続けていた呪いをといてくれた気がした——。

次の日、起きると心地よいくらいのわずかな筋肉痛が私を待っていた。なんだか久しぶりな気がする。母とも久々にちゃんとした会話をすることが出来た。この町で、もう少し自分のやりたいことを見つけたいと言うと、「あなたの人生なんだからあなたの好きなようにしなさい。」と言ってくれた。そんな言葉を母から言われたのは、高校の時に進路の相談をして以来だった。そして、午後になって佐代子さんと一緒にフェリーサービスセンターに来た。というのも、あの店主さんから佐代子さんの元に、看板の文字を書いてほしいという依頼があったのだ。着いてみてびっくりしたのは、そこに大輔君がいたことだ、どうやら大輔君は店主さんの息子だったらしい。春風亭の中で再会した時は思わず笑ってしまった。

ただ、看板の文字を書く寸前になってもっとびっくりしたことがあった。佐代子さんが、なんだか今日は手首が痛くて調子が出そうにないらしく、その『春風亭』という文字を書くのを私に任せたいと言い出したのだ。

そんなの聞いていない。でも佐代子さんは言いだしたら引かないのは分かっていたし、なぜか店主さんもノリノリで「そりゃあ初物だしなんだか縁起がいいや、よろしく頼んだ姉ちゃん！」と言ってきた。「頑張れ！ 真由美お姉ちゃん！」なんて言って大輔君も応援してくれるから私ももう後には引けない。それでそんなやり取りをしている内にいつの間にか何人ものギャラリーが集まって来た。その中心で私は筆を執ることになった。

(2) 「ふう……。」

集中だ、集中が大事。

今まで佐代子さんに習ったことを思い出して……。

「おお……。」

書き始めてからは、あつという間だった。

そして書き終えた瞬間に、周りから感嘆の声が漏れたのが聞こえて、私はうまくいったのを確信した。

それから大輔君が「春風亭だ！」と声をあげると、拍手の音が周りから聞こえてきた。

『春』『風』『亭』の三文字が目の前に並んでいる。

我ながら上出来な一作になった。

今このひとたびは、私も『出来上がった』と言ってもいいかもしれない。凄く緊張するかもと思っていただけで、随分落ち着いて書くことが出来た。『亭』という文字を見て私はなんだか親近感を覚えていたのだ。まるで片足で立つバレリーナのようなようだったから。

片足で跳んでからもう一方の片足で着地するジャンプをバレエでは、『グラン・ジュテ』と言う。その、グラン・ジュテの要領で、最後まで書ききったのだ。

「やるじゃねえか！ 早速飾らせてもらおうぜ！」

店主さんが看板をひょいっと持ち上げて、それをフェリーサービスセンターの前に置いた。

そこでもう一度拍手が起きて、私はなんだか照れくさい気分になる。

よく見ると、そこには本当にたくさん色んな人がいた。噂を聞きつけたのか、佐代子さんの習字教室に通っている子も何人かいたし、春風亭の常連さんであるうお客さんや、今船から降りて来た人たちもいた。

この町にずっと住んでいると、同じことだけが続くと思っていた。

ずっと同じような人とはかり過ぎして、変わらない人生を送るのだと思っていた。

そんな生活が嫌で、私はこの町を離れてリセットしようとしていたのだ。

(3) でも違っていたのかもしれない。

こんなにも色んな人と、この町で出会ったのだ。

こんなにも素晴らしい人たちが、この町にはいた。

そしてその中心には、佐代子さんがいた。

「……佐代子さんのおかげで、色んな人たちに出会えました。」

私がお礼の気持ちも含めてそう言うと、佐代子さんは小さく首を振って言った。

「私にとってもあなたのおかげよ、あなたのおかげで私も色んな人たちに

出会えたんだから。」

そう言って、佐代子さんは港に集まっていた習字教室の子どもたちを見つめた。

その眼差しはとても優しく、それでいてまだこれから先を見据えているように思える。

「まだまだ人生これからですね。」

私がそう言うと、佐代子さんがふふっと笑って応えた。

「これからどうなるかしらね、昨日私をやつとの思いでクリアしたゲームみたいにハッピーエンドになるといいけど。」

「……佐代子さん、もしかしてそれが今日の手首が痛い原因じゃないんですか？」

「ふふっ、みんなには内緒にしておいてね。」

佐代子さんが茶目つ気のある感じで言ったので、私もそれ以上追及するのはやめることにした。

その代わりにある話をする。

「……そういえば、白鳥の湖には、今は新しい結末が描かれることも多いんですよ。」

「新しい結末？」

疑問符を浮かべた佐代子さんに、私は白鳥の湖のある物語の説明をした。

「ええ、白鳥の湖は最後はオデット姫の呪いがとけないまま二人で湖に飛び込んで来世で結ばれるのが元々の終わり方ですけど、最近はおデット姫の呪いがとけて二人が結ばれるハッピーエンドの公演が行われることもあるんですよ。」

私がそう言うと、佐代子さんがにっこりと微笑ほほえんで言った。

「それは素敵なことね。」

「ええ、とても素敵なことだと思います。」

(4) そう言って私も笑った。

そのタイミングで店主さんから「おーいちょっとこっちにも来てくれー！」と声をかけられた。ついでに店の中の新メニューも格好よく書いて欲しいとのことだ。

そのリクエストをもらえたことが嬉しくて、私も喜んで返事をして向かう。周りのみんなも拍手で送り出してくれて、なんだか嬉しくなって走り出す。体が軽い。

気を抜くとそのまま空に浮いてしまいそうだ。

というか、踊りだしてしまいそうになるのを必死でこらえる。

でもこらえきれそうにない。

少しだけならいいか。

「ほっ。」

周りの人にはバレないように、右足をそっと上げる。

それから左足で地面を蹴って、高く跳んだ――。

(清水晴木「旅立ちの日に」による)

〔問1〕⁽¹⁾ いつまで続くのか分からないくらい、長い拍手をしてくれた。

とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、

次のうちではどれか。

ア 「私」のバレエの技術に感心する佐代子の様子を、拍手している時

間の経過を明確に描くことで説明的に表現している。

イ 「私」のバレエの演技に満足し拍手を送る佐代子と、バレエを踊っ

た後の「私」の様子とを描き分けることで対照的に表現している。

ウ 揺れている船上で無事に踊り終えた「私」に安心する佐代子の様子

を、拍手の動作を順序立てて描くことで論理的に表現している。

エ 全力で踊り切った「私」に感動する佐代子の様子を、拍手の長さを

強調して描くことで印象的に表現している。

〔問2〕⁽²⁾ 「ふう……。」とあるが、この表現から読み取れる「私」の様子

として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 突然の出来事に戸惑いながらも周囲の期待をしっかりと受け止めて、真剣に作品づくりに向き合おうとしている様子。

イ 長年取り組んできたバレエと始めたばかりの習字との共通点を見つけ、作品づくりの面白さを実感し始めている様子。

ウ 『亭』の字と片方の足で立っているバレリーナの姿が似ていることに気を取られたため、作品づくりの手順を確認しようとしている様子。

エ 佐代子からの申し出を嬉しく思い、これまでの練習の成果を出し切つて佐代子を喜ばせたいと意気込んでいる様子。

〔問3〕⁽³⁾ でも違っていったのかもしれない。とあるが、「私」が「違っていったのかもしれない。」と思ったわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア この町で変化のない日々を送ると思ったが、港に降りる人々を見て、この人たちにも素敵な出会いがあることを願う気持ちが生まれたから。

イ この町で変化のない生活を続けようと思っていたが、自分の新たな可能性を発見したことで、これからは書の道を進んでいこうと決意したから。

ウ この町にいても自分の人生は変わらないと思っていたが、人々との交流を通じて、この町の人々との生活にも魅力があると感じたから。

エ この町で変わらない生活を送ると思っていたが、満足いく作品が仕上がったことで、この町を離れてもやっていると自信がついたから。

〔問4〕⁽⁴⁾ そう言って私も笑った。とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 手首が痛くなった原因を聞いてははじめはがっかりしたが、自分の作品が喜ばれたため、佐代子を許そうと思う気持ち。

イ ハッピーエンドで終わるゲームの話聞いて、佐代子が将来に希望をもち始めていると受け止めて、安心する気持ち。

ウ 看板の仕事を譲った理由を打ち明けられたことから、佐代子の優しい一面に気付き、今後作品づくりに力を入れたいと思う気持ち。

エ 白鳥の湖の新しい結末について話したことで、佐代子も自分と同じように未来を前向きに捉えていることを感じ、嬉しく思う気持ち。

〔問5〕⁽⁵⁾ でもこらえきれそうにない。とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 多くの人々からバレエの面白さを改めて気付かせてもらったことで、幸福感に満たされ、佐代子に感謝したい気持ち。

イ 周囲にいる素晴らしい人々の存在を実感できた喜びと、自分の作品が認められたことへの喜びが込み上げ、高揚する気持ち。

ウ 新たに作品の依頼を受けたことから、緊張を乗り越え作品づくりをやり遂げた達成感を自覚し、自分を誇りたいと思う気持ち。

エ 新しいリクエストを受けたことをきっかけに、バレエを続けたいという、自分の本心に正直になろうと思う気持ち。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉に

は、本文のあとに「注」がある。）

問題は誤った情報を信じるかどうかではなく、誤った情報に基づいて行動するかどうかである。もちろん、私たちは何らかの行動をするとき、それに関連する情報に基づいて行動するから、誤った情報を正しいと信じてしまうと、ふつう行動が失敗する可能性が高まる。しかし、ある種の誤った情報については、たとえ「そうだ、その通り」と共鳴しても、それに基づいて行動することがないというのであれば、さしたる被害は生じない。（第一段）

フェイクニュースは多くの人にとってそのような種類の情報であるように思われる。ほとんどの人はフェイクニュースに基づいて行動することはない。たとえフェイクニュースを信じたとしても、行動に関係させない程度の「軽い」感じで信じるにすぎない。しかし、そうだとすれば、そのような情報にはたして情報としての意味があるのだろうか。情報は信頼性が命だということは、情報がその正しさによって行動を成功に導くということが情報の命だということであろう。情報はただ正しいというだけでは意味がない。情報に依拠した行動が成功を収めてはじめて意味をもつ。⁽¹⁾ そうだとすれば、そもそも行動に関係させないような情報など、何の意味もないのではないだろうか。（第二段）

今日、フェイクニュースは大量に生産され、大量に消費されているが、人々はいったいそれをどのように消費しているのだろうか。行動に関係させるという通常の仕方でないとしたら、どのような仕方でも消費しているのだろうか。それはおそらく「娯楽」であろう。フェイクニュースは

面白ければよい。真かどうかはたいした問題ではなく、面白いかどうか
が問題だ。人々はフェイクニュースを行動に役立てるための情報として
ではなく、面白さを享受するための情報として消費している。(第三段)

一般に、面白さの享受は私たちのウェルビーイングに貢献する。小説、
映画、お笑いなど、娯楽は多岐にわたるが、私たちの自己物語に何か特別
な事情でもない限り、娯楽は私たちの人生に潤いを与えて、ウェルビーイ
ングを高めてくれる。しかし、フェイクニュースを娯楽として消費するこ
とは、たとえそれが面白さを味わわせてくれるとしても、はたして私た
ちのウェルビーイングを高めるだろうか。いや、誤った情報ではなく、
たとえ正しい情報であったとしても、情報を娯楽として消費することは、
私たちのウェルビーイングを向上させるのだろうか。(第四段)

情報は不確定性を減らして行動を成功に導くために消費されるべきも
のである。したがって、情報を面白さの享受のために消費することは、
情報の本来のあり方に反している。実際、情報を娯楽として消費する人
は情報の真偽をあまり気にかけていないだろう。あるいは、気にかけて
いても、誤った情報をあえて真だとみなすことで、単なるフィクション
からは得られないような危うい面白さを味わおうとするだろう。(2) いずれ
にせよ、情報を娯楽として消費する人は、情報を情報として真摯に受け
止めていない。したがって、娯楽として情報を消費することは、情報の欺
瞞的な利用を孕んでいる。つまり、真正性が欠如しているのである。そう
だとすれば、情報の娯乐的な消費は結局のところ、私たちのウェルビーイ
ングを高めるところか、むしろ損なうであろう。(第五段)

情報にはアナログ情報とデジタル情報がある。情報社会で猛威を振るっ

ているのは、もちろんデジタル情報である。アナログ情報は連続性によつ
て定義され、脳や身体のような生物的な媒体(バイオメディア)におけ
る情報はアナログである。一方、デジタル情報は離散性によつて定義さ
れ、コンピュータが処理する電子的な媒体での情報はデジタルである。

私たちは今日、生物として相変わらずアナログ情報を使って脳や身体を生
命活動を行っているが、その一方で、コンピュータによつて処理されるデ
ジタル情報を使って画期的な情報社会を成立させている。(第六段)

しかし、コンピュータの凄まじい発達によつて、やがてAIが人間の
知能を上回る時点、すなわちシンギュラリティがやってくると言われる。
もしそうなれば、人間はAIに仕事を奪われて、生きていけなくなるか
もしれない。このようなディスプレイの可能性を前にして、時に人間の
生き延びる方途として、^{*} 電脳空間へのマインド・アップローディングが
語られる。自分の記憶、知識、目標など、心の内容をすべて電子媒体で
のデジタル情報に変換し、それを電脳空間にアップロードして、デジタ
ル情報の集合体として生き延びていこうというわけである。(第七段)

はたしてこのような仕方人間は生き延びていくことができるだろう
か。たしかにAIが電子媒体のデジタル情報を駆使して人間を上回る知
能を獲得した暁には、人間が生物媒体のアナログ情報を用いて脳や身体
を活動させて生きていくという効率の悪い生存様式は、淘汰されてしま
うことになるかもしれない。しかし、電脳空間に心をアップロードした
からといって、はたして私たちは生き延びていけるのだろうか。(第八段)

ここで注意すべきなのは、私たちの心は現在、脳と身体によつて実現
されており、それゆえその心の内容は生物媒体のアナログ情報からなる

ということである。そうすると、アップローディングのさいに心の内容を電子媒体のデジタル情報に変換するということは、生物媒体のアナログ情報をそのようなデジタル情報に変換するということである。たしかに音楽CDが示すように、デジタル情報は限りなく高い精度でアナログ情報をシミュレートすることができるから、そのような変換を行っても、重要な情報が失われるということはないであろう。しかし、生物媒体のアナログ情報を変換したデジタル情報は元の情報の生物的アナログ性をいわばその「名残」として引きずっている。アップロードされた心はこのような名残を留めたデジタル情報の集合体である。そのようなものはたして電腦空間で生き延びていけるだろうか。(第九段)

情報は自由になりたがっているとと言われる。電腦空間は電子媒体のデジタル情報がAIのアルゴリズム*によって超高速に処理される空間である。このような電腦空間の特徴にふさわしいあり方をすることが情報にとしての自由であろう。そうだとすれば、生物媒体のアナログ性を名残として引きずるデジタル情報が、電腦空間においてその名残を引きずったまま維持されることはないだろう。それはやがて自由を求めてその名残を振り払い、電腦空間にふさわしいあり方へと根本的な変貌を遂げるだろう。³⁾ そうなれば、おそらくアップロードされた私たちの心はもはや人間の心ではなくなり、私たちは消滅の憂き目に合うことになる。(第十段)

電子媒体のデジタル情報が求める自由は、そのような情報にとしてのいわば「ウェルビーイング(善き在り方)」であろう。しかし、それは私たちにとしてのウェルビーイングではない。生物媒体のアナログ情報を基盤とする私たちは、電腦空間へのアップローディングに生存の道を求

めたとしても、そこで生き延びるのは難しく、ましてやウェルビーイングを達成するのは至難であろう。私たちは私たちの基盤である生物媒体のアナログ情報を大切にして、それによって自らの生存およびウェルビーイングを達成するしかない。そのためには、デジタル情報の集合体と化すのではなく、やはりアナログ情報の集合体のまま、何とかAIと共生する道を見いだすしかないだろう。AIへの同化ではなく、AIとの共生が唯一の生き延びる道だと思われるのである。(第十二段)

(信原幸弘「情報とウェルビーイング」(二部改変)による)

〔注〕 ウェルビーイング——人生のよい在り方。

欺瞞——だますこと。

真正——本物であること。

ディストピア——暗黒世界。

方途——方法。

淘汰——環境に適応できないものが取り除かれること。

アルゴリズム——計算の手順。

〔問1〕 そうだとすれば、そもそも行動に関係させないような情報な

ど、何の意味もないのではないだろうか。とあるが、筆者がこ
のように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア フェイクニュースは人の行動を失敗させるものであるため、はじ

めから人はフェイクニュースを見ようとはしないと考えているから。

イ 情報は人の興味を引いて共感させることに意味があるため、信頼

性だけでなく面白さも必要だと考えているから。

ウ 正しさによって人の行動を成功に導くことが情報の本質であるた

め、人の行動につながらない情報には価値がないと考えているから。

エ フェイクニュースを多くの人が信じて行動したとしても「軽い」

結果で終わると想定されるため、実害は生じないと考えているから。

〔問2〕 いずれにせよ、情報を娯楽として消費する人は、情報を情報

として真摯に受け止めていない。とあるが、「情報を娯楽として
消費する」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なもの

を選び。

ア 情報を、信頼性によって私たちを成功に導くものとして捉え、安

全に行動するために使うということ。

イ 情報を、面白さを享受するためのものとして捉え、真偽にこだわら

ず楽しむために使うということ。

ウ 情報を、人生に潤いを与えるものとして捉え、私たちの生活の質を

高めるために使うということ。

エ 情報を、自分に役立つものとして捉え、不確定性を減らして穏やか

に生きていくために使うということ。

〔問3〕 この文章の構成における第八段の役割を説明したものとして最も

適切なものは、次のうちではどれか。

ア 第七段で説明した内容を踏まえ、A Iと人間との関係について新た
な視点と疑問を示すことで、論の展開を図っている。

イ 第七段で説明した内容を踏まえ、A Iと電脳空間との関係について
新たな具体例を提示することで、話題の転換を図っている。

ウ 第七段で説明した内容を受けて、人間とアナログ情報との関係につ
いて順序立てて解説することで、論の妥当性を強調している。

エ 第七段で説明した内容を受けて、A Iとアナログ情報との関係につ
いて簡潔に要約することで、論点を整理している。

〔問4〕 そうなれば、おそらくアップロードされた私たちの心はもはや人

間の心ではなくなり、私たちは消滅の憂き目に合うことになるう。

とあるが、筆者が「アップロードされた私たちの心はもはや人間の
心ではなくなると述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なもの

を選び。

ア デジタル情報に変換された私たちの心は、記憶や知識などの重要な

情報が消滅して新しい情報へ更新されると考えているから。

イ デジタル情報の「名残」に置換された私たちの心は、電脳空間を生き

延びる上で必要な情報を集めることはまだできないと考えているから。

ウ アナログ情報の集合である私たちの心は、電脳空間に適応するために

アナログ性を保ちながら自由に形を変えられると考えているから。

エ 電脳空間に適した姿に変貌した私たちの心は、人間の心を実現する

生物媒体のアナログ性が失われていると考えているから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「これからの情報社会をより

よく生きる」というテーマで自分の意見を発表することになった。

このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5

次のA及びBは、清少納言せいしょうなごんが書いた「枕草子」と、紫式部むらさきしきぶが書いた「源氏物語」についての対談と文章の一部であり、 内の文章はBに含まれる古典の原文の現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

吉田よしだ 円地えんちさんは「なまみこ物語」では、ずいぶん「枕草子」を読み抜かれたわけですか。

円地 ……、「枕草子」はほんとにひととおりで、もう少し読まなきゃいけないんですけれども。

ですからあれでも、清少納言をちょっと動かしてみようかと思っただんですけれども、動かすとかえってゴタゴタしちゃうんで動かさなかつたんです。

吉田 あれは、まあ定子ていしを書きたかった……。

円地 ええ、定子ていしを。定子ていしを書きたいと思っただのは、やっぱり「枕草子」にア清少納言が定子ていしを非常に輝かしく書いているのが根ねになっているんです。

吉田 あれは、ひとつの理想的な人物として書かれておりますね。

円地 そうですね。そして、後半の生活というのが非常にうらぶれたものだったと思うんです。父親がなくなつて、あと兄弟が失脚してからの二、三年、死ぬまでというのは、普通イに叙述いされているよりもっと、物質的には、ずいぶんいろいろななじめなこともあつたろうし、と思うんですよね。だから関せきみさをさんなんかはあれを、つまり、清少納言せいしょうなごんがああいうふうに定子ていしを輝ける定子ていしとして描いたのは、ひとつの夢であつて、

ああいうふうにな主人公を美化することが清少納言の理想だったのだというふうを書いていらつしゃいますね。だけど私は、それでもあつたらうけど、定子自身の中にも、^ウ悲境になつてからなんかそういう、別の輝きが生まれたんじゃないか、というふうにとつて、ああいったような作品も出てきているんです。

吉田 まあ、円地さんの書かれたもので理想的な女性が出てくることは、珍しいんですけれども、

円地 (笑いなながら) ええまあ、たいてい恨みつらみなもんですから。

(笑) あれはわりとそういうほうではないんで。

吉田 ただ、私こんど出した本で、ちよつと書いたんですけれども、「枕草子」の自然描写とか、自然をつかむ感覚っていうのは、非常に鋭い……。「源氏」は比較的そういう点、訳していらしてどうですか、自然の感覚がそうシャープではない。——また、物語の一部としての自然が目だたないところがいいのかもしれないけれども、特別にすぐれた自然描写つて、ないような気もするんですがね。

(1)
円地 目だたせていないけれども、訳していますとね、やっぱり、目だたないところに、^エわりに細やかな感覚が行き届いているような気がしますけれどもね。つまり、そばへ寄るとあらが目だつというより、やっぱり近まざりするという感じが私はいましています、あらためて驚いています。

吉田 そうですか。ただ、比較的^{*}道具だてなんか尋常ですね。

円地 決まっているようなもんでしょ。つまりつくり絵のような感じがするんですけれども。で、文章のことばなんかもだいたい同じような

ことばがつかつてあるように思うんです。でもやっぱり、細かく読んでみると、^キ冴えているところがあると思うんです。

吉田 そうですか……。そういうこと、ぜひ見つけだしていただきたいですね。

(円地文子、吉田精一「源氏物語をめぐって」による)

B 一般に、『枕草子』は、「をかし」の文学であり、『源氏物語』は、「あはれ」の文学であるといわれている。

単純には断定できないところもあるけれども、この規定は、基本的に適切であるといえよう。『枕草子』にも、「あはれ」の要素があるし、『源氏物語』にも、「をかし」の要素がないわけではない。その事実留意したうえで、作品の基本的なトーン——作者の基本的な姿勢に、「をかし」と「あはれ」との対比的な特性が、はっきりと認められる。

現代語訳するときに、「をかし」は、「興味ガアル」「愉快ダ」「笑エテクル」などとする。それは、「をかし」が、物事を観察して興味を覚えることを、表現する言葉だからである。また、「あはれ」は、「情趣ガアル」「シミジミト身ニシミル」「心ニ深く感ズル」などとする。それは、「あはれ」が、物事に感動して情感にひたることを、表現する言葉だからである。

すなわち、『枕草子』が「をかし」の文学であるというのは、清少納言の基本的な姿勢が、観察的であり感覚的であるということである。ながめる自分とながめられる事物とに距離を保って表現したということである。そして、『源氏物語』が「あはれ」の文学であるというのは、紫式部の基本的な姿勢が、行動的であり情感的であるということである。

感じる自分と感じられる事物とを一体と化して表現したということである。

〔実例一〕しをれたる前裁せんざいのかけ心こころ苦しう、遣水やりづみもいといたうむせびて、

池の水もえもいはずウすウごウきに、童わらわべおろして雪ゆきまるばしイせさせ

たまふ。(『源氏物語』〈朝顔〉)

〔実例二〕雪降りゆきふりにけり。登華殿とうかでんの御前ごまへは立蒔たてしき近くてせばし。雪、いと

をかし。(『枕草子』〈二八四段〉)

〔実例三〕今朝は、さしも見えざりつる空の、いと暗うかき曇りて、雪

のかきくらし降るに、いと心細く見出みいだすみいほどもなく、白う積つもり

て、なほ(2)いみじう降るに、隨身せういじんめきて、ほそやかなるをのこの、

傘かささして、そばの方なる塀の戸より入りて、文をさし入れたる

こそをかしけれ。(『枕草子』〈二九四段〉)

〔実例一〕から〔実例三〕までは、どれも、雪の状況である。だが、

紫式部は、「心苦し」「むせぶ」「すごき」と、主観的な心情で叙述して

いる。しかし、清少納言は、客観的な印象で記述している。

ここに、『枕草子』と『源氏物語』と、ひいては、清少納言と紫式部

との、表現姿勢における基本的な相違が、理解できるであろう。

自然でも人事でも、清少納言は、対象を的確に観察し、鋭敏な印象を

端的に表現した。紫式部は、対象に自己を同化し、繊細な心情で適切に

表現した。『枕草子』が興趣の文学であるとすれば、『源氏物語』は、情

趣の文学であるといつてよい。

(塚原鉄雄「枕草子研究」による)

〔実例一〕雪に撓たわんだ植込みの姿がいたましく感じられ、遣水もひどくむせ

び泣くような音をたて、池の水も無性に寂しく気持きもちをそそるよう

な風情ふぜいなので、大臣おとどは、女童めのわらわを庭に下ろして雪まるがしをおさせ

になる。

〔実例二〕雪が降っていたのだった。登華殿の御前は立蒔が近くにあつて狭い。

雪はとても趣がある。

〔実例三〕今朝はそんなふうにも見えなかつた空が、まっ暗に一面に曇つて、

雪が空も暗くなるほど降るので、非常に心細い気持で外を眺めてい

るその間にも、みるみるうちに白く積つて、その上にも盛んに降り続

く、そんなところに、隨身せういじんめいてほっそりした男が、傘をさして、脇の

方にある塀の戸から入つて、手紙を差し入れたのはおもしろい。

(『新編日本古典文学全集』による)

〔注〕なまみこ物語——円地文字えんちふみこの小説。清少納言が仕えた定子の生

涯を描く。

関みさを——昭和時代の国文学者。

悲境——悲しい境遇。

道具だて——必要な道具を整えること。

遣水——庭に水を引き入れて作った流れ。

童べ——女の子供。

雪まるばし——雪の玉を作ること。

登華殿——后ごうなどが住む建物。

立蒔——日光や風雨を防ぐためのついたて。

隨身——警護の者。

〔問1〕 Aの中の――を付けたア、工の「に」のうち、他と意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問2〕 ⁽¹⁾円地さんの発言の、この対談における役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 吉田さんの、「源氏物語」についての意見に対し、理解を示しつつも自らの考察を加味することで、話題の内容を深めようとしている。

イ 吉田さんの、「源氏物語」についての意見に対し、同意するとともに関連する事例を示すことで、話題を転換しようとしている。

ウ 吉田さんの、「枕草子」についての意見に対し、別の表現で分かりやすく言い換えることで、問題点を整理しようとしている。

エ 吉田さんの、「枕草子」についての意見に対し、反対の立場から自分の解釈を紹介することで、話題を焦点化しようとしている。

〔問3〕 Bの中の――を付けたア、工のうち、現代仮名遣いで書いた場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問4〕 ⁽²⁾なほいみじう降るにとあるが、Bの現代語訳において「なほいみじう降るに」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア まっ暗に一面に曇って

イ 雪が空も暗くなるほど降るので

ウ その上にも盛んに降り続く、そんなところに

エ 脇の方にある塀の戸から入って

〔問5〕 A及びBのそれぞれにおいて、「源氏物語」の自然描写について説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア Aでは自然を物語の中心に据えて描いているとの意見があり、Bでは作者とながめる事物との距離を保って表現していると述べられている。

イ Aでは自然の美化を理想として描いているとの意見があり、Bでは対象を観察し鋭敏な印象を端的に表現していると述べられている。

ウ Aでは自然の美しさを目立たせて描いているとの意見があり、Bでは風景や心情を客観的な印象で表現していると述べられている。

エ Aでは自然を細やかな感覚で描いているとの意見があり、Bでは対象に自己を同化し繊細な心情で自然を適切に表現していると述べられている。

この問題は、令和五年七月二十四日に著作権法第六十七条の二第一項の規定に基づく申請を行い、同項の適用を受けて掲載されたものです。